

JOHA ニュースレター

第 32 号

日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会の案内

日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会 (JOHA15) が 2017 年 9 月 2 日 (土)、3 日 (日) の 2 日間にわたり近畿大学において開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

.....【目次】.....

I. 日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会	シンポジウム
大会開催校より..... 2	2. 自由報告要旨..... 7
1. 大会プログラム	
第 1 日目..... 4	II. 理事会報告..... 11
第 1 分科会	1. 第七期第 回理事会
第 2 分科会	2. 第七期第 回理事会
研究実践交流会	
第 2 日目..... 5	III. お知らせ..... 17
第 3 分科会	1. 会員異動
第 4 分科会	2. 2017 年度会費納入のお願い

.....
*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

《大会開催校より》

JOHA 第 15 回大会開催校理事 上田 貴子 (近畿大学)

このたび日本オーラル・ヒストリー学会大会を開催できますことは近畿大学文芸学部にとって大きな喜びです。

実施準備を通じて、関わったメンバーはオーラル・ヒストリーを改めて意識する機会を得ました。近畿大学には谷川健一氏、野本寛一氏の系譜をうけつぎフィールドワークを重視してきた民俗学研究所があり、本大会実施担当の文芸学部文化・歴史学科では独自の「文化資源学」を旗印に、聞き取り調査や地域の史資料収集を通じて、学生が地域社会にアプローチする活動を行ってきました。大会校企画はこれらの実践活動から発想を得ております。

このほかにも、大変興味深い企画と発表が用意されております。この 2 日間、皆様が充実した研究交流ができますよう務めてまいります。どうぞよろしく申し上げます。

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第 15 回大会

Japan Oral History Association 14th Annual Conference

開催日：2017年9月2日(土)、3日(日)

開催場所：近畿大学東大阪キャンパス A 館、BLOSSOM CAFÉ (「大会会場 校内マップ」p3、参照)

開催校所在地：近畿大学東大阪キャンパス 大阪府東大阪市小若江 3-4-1

交通手段：近鉄大阪線・長瀬駅から徒歩約 10 分

近鉄奈良線・八戸ノ里駅から徒歩約 20 分、バス約 6 分

東大阪キャンパスの交通アクセス：

http://www.kindai.ac.jp/about-kindai/campus-guide/access_higashi-osaka.html

参加費：会員 1,000 円 (2 日通し)、非会員 一般：2,000 円 (1 日参加 1,000 円)、学生他：1,000 円 (1 日参加 500 円)

懇親会費：一般 4,000 円、学生他 2,000 円

開催校理事：上田貴子

学会事務局：佐々木てる、研究活動委員会委員長：蘭信三、会計：中村英代

大会に関してご不明な点がございましたら、JOHA 事務局までお問い合わせください。

* E-mail : [joha.secretariat\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp)、Fax : 017-764-1570

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分 (合計 30 分) で構成されています。
- 2) 配布資料の形式は自由です。会場では印刷できませんので、各自 50 部ほど印刷し、ご持参ください。
- 3) 各会場にパソコンを準備しておりますので、ご利用の場合、USB メモリ等にプレゼンテーションのデータをお持ちください (ご自身の PC 等をご使用の場合、RGB ケーブル接続のみで USB などの接続

方式には対応しておりません。必要な方は変換アダプター等もご準備ください。念のため資料を保存したUSBメモリ等もご持参ください。動作確認等は各分科会の開始前にお願いいたします。会場担当者にご相談ください。

◎ 参加者へのお知らせ

- 1) 会員・非会員ともに両日とも受付してください。参加にあたって事前申し込みは必要ありません。
- 2) 昼食は近畿大学周辺の食堂等をご利用いただくなど、各自でご用意ください。なお、夏期休暇中につき、学内の店舗は休業しております。近隣のコンビニまでは10分程度かかります。
- 3) なおロッカーおよびクロークはございません。荷物は各自で管理をお願いします。

◎ 懇親会案内

9月2日（土）18：00～20：00

会場：近畿大学【未定】*決まり次第お知らせ致します。

参加費：4,000円、学生その他2,000円

◎ 大会会場 校内マップ



1. 大会プログラム

第1日目 9月2日(土)

12:00 受付開始

13:00～15:00 自由報告(A館101教室)

【第一分科会】 (司会:石川良子・佐藤量)

- 1-1 アメリカの歴史的変遷におけるある「日系アメリカ人女性」の経験ーハワイ・日本・アメリカの移動経験から
松平けあき(上智大学)
- 1-2 炭鉱の閉山をめぐるもう一つのリアリティーー元炭鉱職員のライフヒストリーから
坂田勝彦(東日本国際大学)
- 1-3 「聴く」から「伝わる」への転換ーある南洋帰還者とのやり取りの軌跡から
三田 牧(神戸学院大学)
- 1-4 戦後ブラジル移住についてー奄美大島出身の二人のコチア青年移民のライフヒストリーから
加藤里織(神奈川大学)

【第二分科会】 (司会:好井裕明・広谷鏡子)(A館102教室)

- 2-1 日本におけるACT UPー性感染HIV陽性者当事者と協力者はいかに協働して生存とパンデミックに対応してきたか
大島 岳(一橋大学)
- 2-2 聞き書き調査で読み解いた米国大統領選ー1964年のTVCM“Daisy”を事例として
片山 淳(東京経済大学)
- 2-3 テレビの社会派ドキュメンタリーはいかに制作されたか?ー伊東英朗氏が手がけたシリーズ『X年後』(南海放送)を事例に
西村秀樹(近畿大学)・小黒 純(同志社大学)
- 2-4 戦時性暴力被害者証言の信頼性・重要性和、検証の方法論
井上愛美(韓国 国民大学)

15:30～17:30 研究交流実践会(大会開催校企画)(A館102教室)

世代をつなぐ聞き取り～オーラル・ヒストリーの可能性～

趣旨:

ライフストーリー研究の手法で研究を進める高山真氏。聞き書きを残しておくことそしてそれを使って歴史叙述を行おうとする森亜紀子氏。失われつつある生活を聞き取っておこうとする藤井弘章氏。それぞれ社会学、歴史学、民俗学の現場で聞き取り調査を行ってきた3人の研究者から聞き取り調査の現場で感じてきたことを語ってもらう。特に、今回は「世代」をキーワードにとりあげた。世代を

意識することで、苦労したこと、新たな気づきなどを参加者と意見交換し、聞き取り経験を豊かにしていく方法について考えていきたい。

司会：上田貴子（近畿大学）

第一報告 ライフストーリー・インタビューの経験を作品化する

高山真（慶応義塾大学）

第二報告 ひとびとのなかに「歴史」を見る－沖縄に暮らす南洋群島引揚者への調査から－

森亜紀子（同志社大学）

第三報告 民俗学の聞き取り調査－民俗文化の記憶・体験を残すころみ－

藤井弘章（近畿大学）

18:00～20:00 懇親会

第2日目 9月3日（日）

9:00 受付開始

9:30～12:00 自由報告(A館101教室)

【第三分科会】（司会：塚田守・滝田祥子）

3-1 生き抜くための「多文化共生」－当事者支援者の経験から

伊吹 唯（上智大学）

3-2 ライフヒストリーにおける学校経験の位置－公立男女別学校出身者への調査から

徳安慧一（一橋大学）

3-3 はんなり世界の生活－京都北野上七軒花街の衣食住に関する聞き取りを中心に

中原逸郎（京都楓錦会）

3-4 農家を継ぐ女性たち－農家民宿経営をめぐる多世代ライフストーリー

梶本歩美（国際教養大学）

【第四分科会】テーマセッション（A館102教室）

再び〈戦争の子ども〉を考える

趣旨：

本セッションの目的は、甲南大学人間科学研究所が実施した〈戦争の子ども〉プロジェクト（第Ⅰ期 2007～2008年、第Ⅱ期 2009年、第Ⅲ期 2010～2011年）をふりかえり、成果と課題を共有するとともに、今後の研究の展開にむけて議論を深めることにある。ドイツ語のKriegskindの翻訳である〈戦争の子ども〉は、ドイツ語としても新しく、ナチスが政権を掌握して以降、第二次世界大戦中集結までに子ども時代を過ごした（あるいはその期間中に生まれた）世代を指す言葉として、精神分析家の

ミヒャエル・エルマンが2003年にはじめて用いた造語である。エルマンを中心とするミュンヘンの「戦争の子ども時代プロジェクト」は、〈戦争の子ども〉の体験とそれがその後の人生に与えた影響を心理療法の観点から検証するなかで、他の世代よりも高くあらわれる〈戦争の子ども〉の人格障害と戦争体験の密接な関連を明らかにしてきた。

甲南大学の〈戦争の子ども〉プロジェクトは、ドイツの研究との比較をめざしてはじまった。一定の方法によって戦争体験を記録すること、記録された体験からそれらを理解するための理論を構築することがその課題とされた。そうした経緯から甲南大学の〈戦争の子ども〉プロジェクトは、当初はドイツの調査と同様の調査・分析の方法を翻訳によってそのまま採用したが、しだいに方法や視角にアレンジをくわえ独自の特徴をもつようになった。そのひとつが、心理学的アプローチと歴史学的アプローチの対比と相補性への言及であり、そのことがオーラル・ヒストリー研究の方法や特質にたいする問題提起をふくむこととなった。

プロジェクトの終了から5年半を経てふたたび議論の遡上にあげようとするのは、2016年度からはじまった「歴史研究にとってのオーラル・ヒストリー」というJOHA研究活動共通テーマについて、聞き取った戦争体験を歴史化し、その意味を多角的にとらえようとした心理学と歴史学の協働の実践から新たな知見を得ることができないかと考えたからである。

以上から、本セッションではまず、〈戦争の子ども〉プロジェクトを主導した森茂起が、本プロジェクトの成果をふまえて近年の研究成果を報告する。つぎに、歴史研究者の立場で同プロジェクトにかかわった人見佐知子はその経験を読み解く。くわえて、歴史学と社会学の専門家にそれぞれの立場で〈戦争の子ども〉プロジェクトを検証してもらい、可能性と課題を整理することをつうじて論点提示をおこなうこととしたい。

司会・趣旨説明 人見佐知子（岐阜大学）

第一報告 戦争体験の聞き取りにおけるトラウマ記憶の扱い——歴史学と心理学の協働の試み

森茂起（心理学・甲南大学）

第二報告 〈戦争の子ども〉からオーラル・ヒストリーを考える

人見佐知子（歴史学・岐阜大学）

コメント1 倉敷伸子（歴史学・四国学院大学）

コメント2 中村英代（社会学・日本大学）

12：05～13：00

総会（A館102教室）

13：30～16：30 シンポジウム（BLOSSOM CAFÉ 3F 多目的ホール）

戦争経験の継承とオーラルヒストリー——「体験の非共有性」はいかに乗り越えられるか

趣旨：

本シンポジウムは、戦争経験の体験者や非体験者である平和ガイドなどによるその体験の継承の可

能性と意味について論じる。このテーマは桜井厚ほか『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』（2008）などに代表されるように、JOHAにおいては繰り返し論じられてきた中心テーマのひとつだが、今回それを再び取り上げる意義は以下の3点にある。

(1)戦後70年が経って戦争体験者、被爆者、アウシュビツ収容所のサバイバーが亡くなりつつあり、社会の世代交代が進むなかで、戦争にかかわる歴史経験の継承はどのようになされるのが緊急な研究課題となっている。(2)そのような問題意識は同時に社会全般で広く共有されている課題でもある。この課題に長くかかわってきた本学会においてこの社会的課題を共有し、社会に広く発信することは学会の社会的役割だと思われる。

この社会問題化は、体験者の退出・不在だけでなく／そのことも相まって、(3)歴史認識において新自由主義が影響力を増し、しかも領土問題や領土ナショナリズムが強まり、その状況下で日本社会（いや世界）の戦争観が静かに変化していることと密接に関係している。つまり、現在は「戦後」の幾つ目かの〈歴史認識の節目〉にあると思われる。

このようななか、当事者から直接聞き取ることが難しくなりつつある今こそ、戦争経験の継承とオーラルヒストリーの真骨頂が問われている。そこで、戦争体験の聞き取りや継承に卓越した研究実績のあるお三方に、現状の変化を意識しつつ、ご自分の研究実践を手がかりにしてこの課題の今日的課題性に立ち向かってもらう。なお、本シンポジウムは公開シンポジウムである。学会のみでなく広く市民の参加をえて議論を深めたい。

司会 蘭 信三（上智大学）

第一報告 「戦友会」の質的変容と世代交代—戦場体験の継承をめぐる葛藤と可能性

遠藤美幸（神田外国語大学）

第二報告 非被爆者にとっての〈原爆という経験〉—高校生が描く原爆の絵の取り組みから

小倉康嗣（立教大学）

第三報告 アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ

田中雅一（京都大学）

コメンテータ 今野日出晴（岩手大学）

2. 自由報告要旨

【第一分科会】

1-1 アメリカの歴史的変遷におけるある「日系アメリカ人女性」の経験—ハワイ・日本・アメリカの移動経験から

松平けあき（上智大学）

本報告ではハワイ日系二世のある女性のライフヒストリーから、アメリカのマクロな歴史的変遷（第二次大戦、公民権運動等）の中でミクロな個人がいかにか「人種」、ナショナリティ、ジェンダーに係る経験をし、主体的行動に転換させてきたかを論じる。T夫人はハワイに生まれ、戦時下に「日本的なも

の」への否定により仏教からキリスト教に改宗する。その後夫の軍務で日本に居住し、白人兵に服従する日本人女性と出会う。子供と養子を育て 1960 年代には、ソーシャルワーカーになった夫とシカゴに居住し公民権運動に参加した。ダイナミックな歴史的変遷の中複数の社会を移動した経験から、彼女が「日系」「アメリカ市民」「女性」であることの意識を構築、再構築していくプロセスを明らかにする。

1-2 炭鉱の閉山をめぐるもう一つのリアリティー—元炭鉱職員のライフヒストリーから

坂田勝彦（東日本大学）

本報告は、杵島炭鉱（佐賀県杵島郡）の元職員のライフヒストリーをもとに、彼らが炭鉱閉山という出来事をいかに経験し、その後の人生をどのように歩んできたかを検討する。

炭鉱労働者というと、イメージされるのは多くの場合、地下労働を担った鉱員たちだろう。だが、職員たちも炭鉱という世界を構成する重要なアクターであり、鉱員たちと同じように、彼らも炭鉱の閉山後、従前と大きく異なる人生を歩んできた。

炭鉱閉山後の経験について、鉱害復旧事業に携わった元職員は炭鉱の「後始末」と表現した。また、同僚と起業した元職員は炭鉱の閉山という出来事を「終戦」と振り返る。彼らの言葉からは、炭鉱の閉山を巡って、裸一貫で第二の人生を模索した多くの鉱員たちと異なる意味合いが浮き彫りになる。

1-3 「聴く」から「伝わる」への転換：ある南洋帰還者とのやり取りの軌跡から

三田 牧（神戸学院大学）

他者の人生の語りには耳を傾ける時、語り手が伝えようとしていることが調査者に伝わる保証はない。語りは「情報」としては理解されても、話者にとって語りをもつ「意味」を聞き手がつかむことは難しい。

本発表では、南洋群島での経験を語ってくれたある人と私との数年にわたるやりとりの軌跡を分析する。壊れたレコードのように幾度も繰り返される同じ出来事の語りを通し、私は彼女の過去をセピア色の情景として聴いていた。そのような「聴きのモード」が崩れたのが、彼女と最後に会った時だった。その時、何が起こり、何がどのように変わったのか。

本発表では他者の語りを「聴く」ことが、語りの意味が「伝わる」ことにつながった時、どんな可能性が拓けるかについて考察する。

【第二分科会】

2-1 日本における ACT UP—性感染 HIV 陽性者当事者と協力者はいかに協働して生存とパンデミックに対応してきたか

大島 岳（一橋大学）

日本におけるエイズの歴史理解の枠組みは、1989 年の薬害エイズ訴訟から 96 年和解による勝訴とそれを取り巻く社会運動が中心であり大きな社会的インパクトを有している。しかしその成功の予期せぬ効果は、薬害という「良い」エイズと、日本の HIV の大部分を占める性感染を「悪い」エイズ（鮎川 2000:125）とする二項対立的な理解に伴う分断と非対称性が生じたことにある。本報告では、薬害訴訟

というエイズの歴史のマスターナラティブに加えて、オーラル・ヒストリーの手法を用いて性感染当事者とその協力者がいかに自らの生存や生活の質を高めるため、そしてパンデミックを防ぐ目的のために協働してきたかを報告する。その特徴は合衆国の ACT UP などパフォーマンスを最大限に活用したのとは異なり、日本ではプラグマティックな戦術と実践を重視したことにある。そのため当事者の果たした役割の大きさは見えにくく既存の歴史から見落とされがちであったものの、そこで見えてくる歴史の諸相は、一つの「われら勝ち得し世界」(Weeks 2007=2015) である。

2-2 聞き書き調査で読み解いた米国大統領選－1964年のTVCM“Daisy”を事例として

片山 淳 (東京経済大学)

米国の大統領選ではネガティブCMの応酬も珍しくはないが、その歴史的な先駆けと言えるのが1964年に大きな反響を巻き起こした民主党の”Daisy”であろう。本発表は筆者が2000年に制作者の故トニー・シュワルツ (Tony Schwartz) 氏に実施したインタビューを事例に、当事者への聞き書き調査を通じてキャンペーンの舞台裏についての情報を得るだけではなく、米国の選挙キャンペーンにおけるコミュニケーションの在り方の再検証も意図している。また報告は、こういった検証におけるオーラル・ヒストリー研究の意義についても考察するものである。

2-3 テレビの社会派ドキュメンタリーはいかに制作されたか？－伊東英朗氏が手がけたシリーズ『X年後』(南海放送)を事例に

西村秀樹 (近畿大学) 小黑 純 (同志社大学)

1953年日本でテレビ放送が始まってまもなく、NHKの番組『日本の素顔』が水俣病をテーマにした『奇病のかげに』(1959年)を放送し、テレビドキュメンタリーの制作が本格化した。以来いわゆる「社会派ドキュメンタリー」は放送ジャーナリズムの一翼を担ってきた。近年の代表例として、南海放送が放送した『放射線を浴びたX年後』を事例に、ドキュメンタリーの制作過程を調査した。この作品は、米政府による南太平洋での水爆実験により、周辺海域で操業中だった第五福竜丸などのマグロ漁船が被爆し、乗組員たちがガンなどで次々に死亡する事実に向っている。社会的な評価は高く、数々の賞を受けた。どのように作品が制作され、番組が放送されるに至ったのか。制作に格闘した伊東英朗さんから聞き取りを進め、オーラル・ヒストリー化を試み、作品の成立過程を探求する。

2-4 戦時性暴力被害者証言の信頼性・重要性と、検証の方法論

井上愛美 (韓国 国民大学)

河野談話が認めた強制性を否定する人々は、それを示す証拠がないと言う。けれども河野談話に当たっては、強制性を示す文書史料は見つからなかったが、被害者の証言を証拠としたのだった。つまり、彼らは被害者の証言を証拠として認めていないということである。彼らはオーラル・ヒストリーの信頼性を無条件に否定している。オーラル・ヒストリーの信頼性を疑うとき、よく矛盾点が指摘される。戦時性暴力被害者証言の場合、証言に矛盾が生じる要因と、証言の重要性を知るには、証言されているのが暴力の記憶であることに注目する必要がある。また、「慰安婦」被害者証言の信頼性を確かめるため

に関係者が用いてきた方法は、他の種類のオーラル・ヒストリーにも役立つだろう。しかしながら、証言の検証が被害者に対するさらなる暴力になり兼ねない点には、留意が必要だ。

【第三分科会】

3-1 生き抜くための「多文化共生」—当事者支援者の経験から

伊吹 唯（上智大学）

本報告では、中国帰国者二世のライフストーリーから多文化共生支援を考察する。彼女が中国での苦勞、日本への移動経験、日本での生活などを通して身に付けた「生活戦略」は、彼女自身が行う他の帰国者や中国人に対する多文化支援の方針の基礎にある。このような国境を越えた移動を経験した「当事者」による支援は、移民コミュニティのなかで伝統的に行われてきた相互扶助でもあり、地方自治体による多文化共生政策のなかにも組み込まれている。にもかかわらず、これまでの多文化共生研究ではその視点は後景化され、多文化共生規範による支援の評価が多く行われてきた。本報告では、当事者支援者の経験から、規範的な議論にとらわれずに現場における支援の意義を明らかにする。

3-2 ライフヒストリーにおける学校経験の位置：公立男女別学校出身者への調査から

徳安慧一（一橋大学）

本報告は、個人のライフヒストリーにおける学校経験への意味づけに着目し、人生の軌跡を振り返るにあたって、特に（後期）中等教育期間、すなわち高校にまつわる経験がどのように遡及的に解釈され、位置づけられるのかについて分析する。対象としては、公立男女別学校同窓会役員へのインタビュー調査から、進路選択を通じて自らのライフコースに与えた影響や学校に対する評価の語りを検討する。また、共学化への反対運動、受験実績や偏差値による学校の序列化といった出身校の現状に対する語りも取り上げる。これらの語りの分析を通じて、本報告では、在学期間を時間的・空間的に超えて再構成された学校経験が、個人の生とどのように関係しているのかについて考察する。

3-3 はんなり世界の生活—京都北野上七軒花街の衣食住に関する聞き取りを中心に—

中原逸郎（京都楓錦会）

花街は舞妓や芸妓が芸（芸能と同義）を披露し、地元の花街言葉による会話によって顧客を応接する場である。その芸の担い手の居住地で、かつ、芸の披露の場である花街の生活空間の把握は、芸の継承に関わる課題の発見上重要である。

花街の環境の変化については居住空間に関する学術研究も確認されるが、衣食住を含めた生活者の視点に立った花街の調査・研究は十分な蓄積があると言えない。

花街は出所（出自）のわかる顧客中心に形成された排他的地域であるが、生活実態の把握が芸の継承上も重要だと思われる。そのため、戦後新作舞踊を発表してきた北野上七軒（かみしちけん）（京都市上京区）を調査地を選び、生活データの収集を試みた。

3-4 農家を継ぐ女性たち—農家民宿経営をめぐる多世代ライフストーリー—

梶本歩美（国際教養大学）

本報告は、秋田県仙北市で農家民宿を営む女性とその家族のライフストーリーを通して、女性がどのように農家としての生き方を模索し、切り拓いているのかを考察するものである。農家民宿とは農家が自宅を利用して、県内外の来客者に農業や食文化などの農村体験を提供するものであり、伝統的な日本の家族農業のあり方を変える取り組みともいえる。農家民宿による新たな経済活動や人的交流が、農家としての生き方にどのような変化を生み出しているのか。報告者は、農家民宿を経営する 30 代と 40 代の農村女性およびその親と祖母を対象にライフストーリーの聞き取りを行った。女性たちは、親や祖父母世代から農家としての生き方の何を継承し、何を切断しながら、自身の農家としての生き方を模索しているのかを考察する。

II. 理事会報告

1. 第七期第五理事会 議事録

日時：2016 年 12 月 11 日

場所 上智大学 2 号館 6 階 615a 室

出席者：有末賢、佐々木てる、中村英代、小林多寿子、佐藤量、山田富秋、赤嶺淳、蘭信三、好井裕明、
大門正克、人見佐知子、平井和子、八木良広、岩崎美智子（順不同）

欠席：桜井厚、山田富秋

議事録作成者：赤嶺淳

1 議事記録者確認および前回の議事録確認

2 会長

大会でおこなった慰安婦シンポに取材に来たメディアのうち、『社会新報』は、すでに記事にしている。それ以外は、確認できていないものの、最初から「取材の参考にさせてもらう」という話だった。

3 編集委員会

- ・学会誌の価格改定については、今後、J-Stage への掲載手続き（アップ）手数料とともにインターブックスと検討する。
- ・事務局／編集委員会に寄贈いただいた書籍については、理事や理事周辺の会員に積極的に書評を投稿してもらいたい。執筆希望者には該当書を送付するとともに、執筆希望がないものは、編集委員長／もしくは編集委員が所属する機関の図書館に寄贈する。
- ・書評の対象を考察するにあたっては、その著書がオーラルヒストリーに、いかに依拠したかを考慮する必要がある。
- ・非会員の著書も、掲載可となっている。

- ・書評の掲載を希望する場合には、著書名と執筆者予定者とセットで編集委員会に推薦してもらいたい。
- ・現在、ネット上の規約では、執筆者に雑誌を「3部謹呈」することになっているのを、「2部謹呈」に変更する。
- ・『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号に関しては、3月31日を〆切とするが、原稿の提出を・2017年3月20日からとする。
- ・会費を振り込んだ段階で、投稿の権利が発生する（申込書の日付け）。

4 研究活動委員会（別紙参照）

○2017年3月11日にシンポジウム「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティブをめぐる歴史学と社会学の対話」を開催する。

- ・日時：13時30分～17時30分（12時～18時）
- ・場所：上智大学2号館5階508室
- ・主催：JOHA、共催：グローバルスタディーズ研究科（予定）。
- ・講演者の長谷川さんも朴さんも、JOHA非会員。交通費は実費とし、謝金は1万円とする。
- ・講演者ほかの弁当、飲み物については、領収書を会計まで提出。
- ・今年度は研究活動費として2万円を計上している。また、大会運営費も30万円を計上し、その残額もあるので比較的余裕がある。
- ・参加費は、会員は無料、非会員は500円とする。
- ・広報でNLにも入れてもらいたい。
- ・ポスターも作成する。デザインは広報委員が担当し、理事が個人で印刷する。
- ・このシンポジウムをふくめて、どれを学会誌に掲載するかについては、議論する必要がある。

○2017年大会@近大のシンポ案（別紙参照）

- ・上田貴子先生には、2017年度より開催校理事として参画してもらおう。
- ・会場は、50人、100人を収容できる教室をおさえる予定。シンポは200人収用の教室を予定。教室の使用は無料。シンポ用として、きれいな180人のホールを使用することもできるが、そちらは大学が管理しているので来年度4月以降にならないとわからない。
- ・懇親会は、学内のカフェテリアを予定。25名程度の参加を見込む。

○公開シンポ案 9/3（日）午後「戦争経験の継承とオーラル・ヒストリー」（蘭）

- ・テーマセッション①（上田・開催校企画）。民俗学研究所の同僚（藤井弘章）と森亜紀子（南洋群島からの引き揚げ）の協力を得て、「聞き取りを、どのように活かすか」という方向で検討中。
- ・テーマセッション②（人見）「心理学と歴史学の協働によるオーラル・ヒストリー」。2008年から2011まで甲南大学で実施した「戦争の子ども」プロジェクトのその後について、それに参加した個々の研究者とあらためて考えてみたい。（@甲南大学。2011年に本を出版してプロジェクトは終了）。

→個々の研究者とあらためて実施。森茂起（心理学・甲南大）、人見（歴史学）、未定（オーラル・

ヒストリー／社会学系にコメンテーターを依頼)

- 共同報告／テーマセッションをみとめ、公募する。次 NL で予告する。
 - ・若手会員の自発的な提案があれば、掬いあげていく。
 - ・今回の大会を関西地域での人材掘り起こしの機会とする。
- 学会誌への収録をどうするか？ 学会誌以外の多様な媒体を考えるとともに、なんらかの記録が残るようにする。
- 従軍慰安婦シンポは、I 社で進行中。
- 2018 年の開催校も、今期の理事会で決めておいた方がよい。

5 広報委員会

- ・現在、NL31 を編集集中。2 校目をチェックしてもらっているところ。今週末ぐらいには発行したい。
- ・3.11 シンポ、2017 年度大会のテーマセッション募集を明記する。
- ・3.11 シンポのポスターのデザインは広報委員会が制作する。

6 会計

- ・学会誌 11 号については、インターブックスにも在庫なし。
- ・2015 年度の会費未納者には、通常通り、請求する。送付する雑誌がなくなった段階で、特別措置として返金ではなく、次年度（2017 年度）の請求を減額（1000 円）することを検討する。
- ・J-Stage の情報は、個別には教えない。
- ・督促状については、会計が原案を作成し、理事メールで文面チェックする。
- ・年会費の減額の場合、次期の会計にひきつぎをしっかりとおこなう。
- ・学会誌の広告収入は 9 万円。大会費も赤字なし。詳細は 6 月に報告する。大会開催費は、今年は 30 万円を計上したが、通常は 15 万円程度の予算である。これに含まれるは会場費と非会員の交通費と謝金のみである。
- ・非理事が大会開催校理事として参画してくれる場合や、東京以外の開催で参加者数の減少があった場合には、懇親会補助を出すべきである。
- ・例年だと、「25 名前後が参加し、10 万円が現実的な予算」である。
- ・開催校理事には、注文と領収書だけをお願いします。➡赤字の場合は、補助になる。
- ・手伝い要員は、学部生しかいない。2 日目の労働がタフとなる。阪大（日本学）、関学（社会学）、立命に会員多数。実行委員会をつくって、上田さんを助けないとむずかしい。佐藤量さんが指揮する。

7 事務局

- ・会員が増加している。
- ・次期理事選挙がある。選挙の実施体制の詳細は、開票作業もふくめ川又さんに訊く。
- ・佐々木さんを中心にすすめる。
- ・選挙権の確認は中村さんがおこなう。

8 その他

- ・学術会議が、理事の男性／女性別の人数を訊いてくるが、答えるべきか？
- ・JOHA は、社会学系コンソーシアムに加盟していないので、3.11 シンポの広告もむずかしい？

9 次回理事会

6月25日（日）上智大学

2. 第七期第六回理事会 議事録

日時：2017年6月25日（日） 14：00～

場所：上智大学 2号館6階615a室

出席者：有末賢、佐々木てる、中村英代、佐藤量、赤嶺淳、人見佐知子、上田貴子、山田富秋（順不同）

欠席者：蘭信三、岩崎美智子、桜井厚、平井和子、好井裕明、八木良広、大門正克、小林多寿子

議事録作成者：佐藤量

1. 議事録記載者確認および前回の議事録確認

2. 会長より

有末会長から、第7期を総括する挨拶あり、今期のテーマである「歴史研究にとってのオーラル・ヒストリー」をめぐって様々なシンポジウムやセッションが展開され、有意義な議論が交わされたことが述べられた。

3. 編集委員会

○次号出版に向けて

- ・赤嶺編集委員長より報告があり、以下のように審議を行った。
- ・JOHA13への投稿本数と掲載論文について、論文10本、研究ノート1本、聞き書き資料2本（合計13本）の投稿本数のうち、論文4本、聞き書き資料2本、書評2本（合計6本）が掲載となったことが報告された。
- ・投稿本数の増加にともなって、論考そのものの目的が「JOHAの目的」（会則第二章 第二条）にかなっているか疑わしい論考が散見されるようになったことが報告された。今後さらに多様な論考が投稿されてくることが予想されるため、「JOHAの目的は何か？」や「オーラル・ヒストリー研究とは、何なのか？」といった議論が、今後も編集委員会で議論していく必要性が述べられ、理事からも了解の旨の発言があった。
- ・大会時における学会誌の販売を、今年度の大会（2017年9月、近畿大学）から中止することについて提案され、承認された。各理事からは、大会時に販売しないのであれば、販売にかかる人件費やスペースを抑えることができることや、編集作業にさらに時間を割くことが可能になるなど

の発言があった。

- ・現在執筆者には学会誌を「2部進呈」しているが、「1部進呈」に変更することが提案され、承認された。

○J-Stage への移行作業について

- ・投稿数の増加と特集の充実により、学会誌の価格改定について検討する必要性が述べられ、継続審議とすることが確認された。
- ・今後の J-Stage へのアップロード作業料等も含めて、インターブックスから提案された見積もりも参照しながら、出版社と交渉していく必要性が述べられた。
- ・J-Stage への移行作業費について、新予算案に計上する必要性が提案され、質疑が交わされた。現時点では予備費とすることが確認された。

○学会誌への広告依頼

- ・学会誌への広告依頼について、今後も継続して出版社に依頼していくことが確認された。新規の出版社として、ハーベスト社、ナカニシヤ出版、生活書院、世界思想社（以上、山田先生）、明石書店（佐々木先生）、吉川弘文館（赤嶺先生）にそれぞれ依頼し、それ以外にも新規開拓を積極的に進めていくことが確認された。

4. 研究活動委員会

○2017年9月大会について

- ・蘭研究活動委員長欠席のため、佐藤量理事より報告があり、審議を行った。
- ・2017年度大会の自由報告には、12件のエントリーがあり、3分科会を構成したことが報告された。
- ・テーマセッション、シンポジウム、大会校企画の研究交流実践会について、それぞれの報告者およびコメンテーター、各セッションの趣旨、報告タイトルはすでに決定していることが報告された。
- ・各分科会の構成、各報告タイトル、各報告要旨、大会校企画、テーマセッション、シンポジウム内容、大会全体のスケジュールについて、大会プログラム案として提案され、承認された。
- ・大会時の理事の弁当は手配せず、弁当持参とすることが提案され、承認された。ただし、大会を補佐してくれる学生と、2日目のシンポジウムの事前打ち合わせ用には弁当を手配する旨の発言があり、承認された。
- ・登壇者が大会当日に連絡が取れるように、事務局のメールアドレスを登壇者に告知することが提案され、承認された。
- ・登壇者のレジュメについては、登壇者本人が印刷し、大会プログラムについては研活で印刷することが確認された。
- ・大会ポスターについて、デザインは広報で作成し、PDF化したものを大会校で印刷することが確認された。
- ・懇親会費の金額について審議され、有職者4,000円、学生2,000円とすることが承認された。
- ・シンポジウムのゲスト（非会員）については、懇親会に招待することが提案され、承認された。

○会員外の報告について

- ・会員外の報告者がテーマセッションなどで報告する場合について、質疑が交わされた。テーマセッションの企画者や筆頭報告者は会員である必要があるが、そうでなければ会員外でも報告することができることが確認された。またこの内容については、会則に明記せず、研究活動委員会の内規とすることが確認された。

5. 広報委員会

- ・広報担当の八木理事欠席のため、代理で佐々木事務局長より報告があった。
- ・7月下旬に JOHA ニュースレター32号を発行し、大会プログラムを会員に告知することが報告された。
- ・大会ポスターについて審議され、デザインは広報委員で作成し、PDF化したものを大会校で印刷することが確認された。

6. 会計

- ・会計担当の中村委員より、2016年度決算報告および2017年度予算案の報告があった。
- ・学会誌の広告収入について、昨年度は8社の掲載があったことが報告された。今年度も積極的に掲載依頼を行っていくことが確認された。
- ・旅費交通費について説明があり、繰越金増加にともない理事への旅費補助に充てられるよう増額したことが報告され、承認された。
- ・新予算案における J-Stage 関連経費について質疑が交わされ、現時点では予備費とすることが確認された。

7. 事務局

- ・新入会員が18名あり、入会が承認された。また4名の退会があったことが報告された。
- ・理事選挙の結果、上位8名の専任理事が選出されたことが報告された。今後推薦理事を選任していくことが確認された。

8. 次回理事会

9月2日(土) 近畿大学 AM11:00～

- ・次回理事会は、新旧理事会として大会初日に開催することが確認された。

Ⅲ. お知らせ

1. 会員異動（2016年12月1日～2017年6月25日）

(1) 新入会員（入会順）

松永伸太郎	一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程
浅井直子	明星大学通信制大学院
横塚紀子	新潟大学現代社会文化研究科
田中祐輔	東洋大学国際教育センター
大石友則	会社員
中山貴子	国公立大学助手
永田大輔	筑波大学博士課程後期
前原直子	沖縄国際大学
横関理恵	北海道大学教育学院博士課程
中沢翔馬	岩手県農業共済組合宮古地域センター
坂田勝彦	東日本国際大学
樋田有一郎	早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程
西垣真澄	ピアサポートグループワンダウン
佐野直子	名古屋市立大学人文社会学部
伊吹唯	上智大学 グローバル・スタディーズ研究科
坪田珠里	京都外国語大学大学院
片山淳	東京経済大学
申美花	茨城キリスト教大学
佐藤純子	東京経済大学

(2) 退会

康陽球 川村千鶴子 河村裕樹 岩間優希

*連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 佐々木てる）

2. 2017年度（2017年4月1日～2018年3月31日）の会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金ほどよろしくごお願いいたします。

会費のご納入につきましては8月末日までにごお願いしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになってしまいます。ご理解のほどよろしくごお願いいたします。

また、一部ですが2016年度分、2015年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらも早めのご納入をよろしくごお願いいたします。

■年会費

一般会員：5000円 学生・その他会員：3000円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行にある青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキューウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の中村（hideyonm@gmail.com）までお問い合わせください。

（会計 中村 英代）

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニュースレター第32号

2017年8月1日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA事務局

〒030-0196 青森県青森市大字合子沢字山崎 153-4

青森公立大学 佐々木てる研究室

FAX : 017-764-1570

E-mail : [joha.secretariat\[at\]ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp)
